

2010年4月30日

在日フィリピン人介護者研究会

事務局：高畑 幸（広島国際学院大学）

## 『2008在日フィリピン人介護者調査報告書』のご案内

この報告書は、2008年6月から10月に在日フィリピン人介護者研究会が行った「2008在日フィリピン人介護者調査」（文部科学省科学研究費助成研究）の結果をまとめたものです。経済連携協定により2008年からインドネシア人、また2009年からフィリピン人の介護福祉士候補者が来日し、介護の現場で働き始めています。一方、日本では20万人以上のフィリピン人が暮らしていますが、2008年の調査時点で、すでに2000人以上の在日フィリピン人がホームヘルパー（介護保険法に基づく訪問介護員）2級資格を取得していることが推察されました。

本調査の回答者190人のうち約半数が、すでに日本で介護職についての経験を持ちます。そして彼女・彼らが、経済連携協定により来日したフィリピン人介護福祉士候補者の指導役となっている施設が若干ながらあるほどです。今後、介護現場にはさらに外国人が増えることが予想されます。そこへ先陣を切って参入した在日フィリピン人が、どんな思いで介護に取り組み、いかなる課題を抱えているのか。それがこの報告書の示すところです。

結論を先取りすれば、今後、介護現場で外国人を単なる労働力としてではなく人的資源として活用するためには、言語的支援に加えて労働条件の改善、そして職場における日本人との円滑なコミュニケーションと人間関係の構築のための支援が必要だと考えられます。本報告書がその指針となれば幸いです。

### ■調査結果の概要

(1) 190名の回答者の平均像は「就労のため来日し、結婚して定住した在日歴10年以上になる30代後半の女性」で、「人の役にたちたい」との思いから資格を取得しようとしたが「介護の専門用語」が難しいと感じています。

(2) 資格取得後、「日本人との人間関係が心配」と感じながらも約半数が介護職につき、その約6割が施設で勤務しましたが多くがパート労働でした。職場で難しいと思ったことは、利用者さんに対しては「日本の文化や習慣の理解」で、日本人の同僚に対しては「報告・連絡・情報の共有」でした。

(3) 日本で介護職につくことは「自分の能力向上になる」と考えており、介護職にとって大切なのは「利用者の理解」だと感じています。多くの人が、事情が許せば介護職を長く続けたいと考えています。

### ■出版物の概要

書名：2008在日フィリピン人介護者調査報告書 PDF版（42ページ） 発行日：2010年3月31日

編集・発行：在日フィリピン人介護者研究会

研究会の構成員：高畑幸（広島国際学院大学）、中井久子（大阪人間科学大学）、カルロス、マリア・レイナルース（龍谷大学）、後藤由美子（高知女子大学）、鈴木伸枝（千葉大学）

事務局：〒739-0321 広島市安芸区中野6-20-1 広島国際学院大学現代社会学部・高畑研究室

メール：s.takahata@hkg.ac.jp

報告書をご希望の方には PDF 版をお送りします。事務局の高畑(s.takahata@hkg.ac.jp)へ、件名を「報告書希望」と書き、お名前とご所属を明記の上、メールでご請求ください。